

『人格医学』 ～ 『がん哲学』 & 『がん哲学外来』 のコンセプト ～

2025 年 1 月 18 日 神戸での講演【がん哲学外来第 1 回 Being Café 思いを語る場(野本亮一代表)】
(救世軍神戸小隊:キリスト教会)に赴いた。新幹線の車内から雪の積もる壮大な【富士山】を眺めた。何時も心が慰められる。

今回、ジュネーブ生まれのポール・トゥルニエ (Paul Tournier:1898-1986)が、1977年来日の時、神戸で、聴講したのが鮮明に思い出された。どうして、Paul Tournier の講演を聴く場に導かれたのか、思い出せない！

ポール・トゥルニエは、スイスの精神科医で『医者と患者の人格的なふれあい』を重視し、『人格医学』の提唱者であったとされる。筆者は、1975年7月6日、21歳の医学部の学生時代に購入し、『聖書と医学』（赤星進訳 聖文舎発行:画像）を 1975年7月16日通読したものである。400ページを超える本で、至る所に、赤線が引いてあり、まさに、夜を徹して読んだことであろう。

【どの人にとっても、彼に現在起こりつつあることは ― 病気、不安、悲しみ、困難 ― が問題なのである。彼はその出来事から何かを学び、決定を下さなければならぬのである。彼はどこに助けを見いだすであろうか。】(page 119) に、【『がん哲学』 & 『がん哲学外来』 のコンセプト】がある。

医療活動は『生命への畏敬』の実践であった とのことである。『医師の 2 つの使命』（下記）については、ポール・トゥルニエ から学んだものである。そして、今の『がん哲学 & がん哲学外来』に繋がった。『不思議な人生の出会い』である。

- ① 「学問的、科学的な責任」で、病気を 直接治療する → 学者的な面
- ② 「人間的な責任」で、手をさしのべる → 患者と温かい人間としての関係

今回は、【『医療活動』 & 『医師の 2 つの使命』】の復習の貴重な『神戸の旅』となった。

パウル・トゥルニエ著

聖書と医学

ある医師の臨床体験の中から



赤星達訳

聖文舎